

私塾と寺子屋教育

那珂市歴史民俗資料館



江戸時代から明治初期にかけての農村での教育は、僧侶や神官・修験者などが師匠となって読み・書き・そろばんを教えた。これが寺子屋教育であり、教え子は寺子と呼ばれた。戦国時代末期に寺院で武士や町家の子弟を教育したことに源流があるので、後には寺院以外の塾も寺子屋といった。主な教科書は「庭訓往来」「実語教」「女今川」「書簡文」など、それらの素読、暗記、書写を中心とする初歩的教育であった。また「論語」「孟子」「孝経」などの儒学を中心とする道徳的なものでもあった。寺子は村内でも役付きの子息か学問好きの子であり、7歳くらいから入門した。塾は寺子屋より一歩進んだ内容の教育であったと考えられる。以下は主な指導者。(写真は「長左衛門鈴木先生之墓」：後台)

原邦明	号は好誼、額田村の人。長久保赤水門人であった太田の立川淳美に師事して学問修業、真率会を設けて「孝経」「論語」を講じて道徳、婦道を指導し、汁講による質素倹約を奨励した。近郷からの子弟百余人を数え、嘉永5年(1852)に門人たちが墓碑を引接寺に建立。「占春亭日記」などを残す。
根本藤兵衛	額田村の人。幼少から学を好み名声は近隣に聞こえた。庄屋職を辞して江戸に出て紀州藩士榊原元軌に師事、帰郷後は詩歌を中心にさらに指導に専念する。四方の雅客墨人が来訪、明治9年(1876)門人300人が鱗勝院に建碑。
奈治原如清・ 民部父子	鴻巣村宝幢院の修験であった如清は寛政期(1789～1800)に塾を開き、野口・上坪・下岩瀬・上国井など近郷からの門人は400人超といわれる。民部は馬頭村に生まれ、養子となって如清の後を継いだ。天保期に飯田村・戸崎村鎮守の神官となり、門弟265人を数えた。明治3年(1870)歿、72歳。
山田京山	西木倉村生まれ、水戸藩士矢口氏に学ぶ。書画・詩歌をよくし、殊に俳句では宗匠の資格を得た。門人500余人という。大正5年(1916)歿、73歳。
海野家三代 英彦 照睿 瑞彦	海野家は鹿島字堂山吉祥院の修験者である。英彦は奈良原如清の門人で天保12年(1841)歿。門人は地元をはじめ太田、助川、宇留野など広範囲にわたっている。照睿は英彦の長子で詩歌・俳諧をよくし、算術・医術にも通じた。瑞彦は照睿の長子で幼少より祖父の薫陶を受けた。学制発布後、境内に創設された朋来小学校で教鞭を執る。大正5年(1916)歿、85歳。
中井川量之介	門部村の農民、水戸の青山延光・藤田東湖に師事して和歌・俳諧をよくし、門人200余人。朋来小学校で教鞭を執る。碑は門部坪の共同墓地内にある。
石川貫道	太田増井村の本田家から南酒出村石川家の養子となり関孝和流の和算塾を開く。門人は久慈、多賀、鹿島郡からも集まり、連日30人を超えたという。明治6年(1873)北・南酒出村設置の深耕小学校で数学の教員となる。
藤田安崇	古徳村の神官、文久元年(1862)歿、54歳。藤田屋敷と称する一廓の墓碑には小場、盛金、西金、八田などからの門人84名が刻まれている。
安西覚順	慶応2年(1866)誉田村(常陸太田市)生まれ、71世常福寺住職。寺の入口に耕餘学舎を設け、農閑期を利用して儒学・歴史・唐詩選などを教授、門人ら30～40人が集まり教えを受けた。大正10年(1921)歿、55歳。
斎藤監物、 徳親・徳寛、務	斎藤家は静神社神官。監物の子、徳親・徳寛兄弟と徳親の子、務と三代にわたる。監物は桜田烈士。加倉井砂山・藤田東湖に学ぶ。大宮郷校、野口郷校でも教授。
鈴木長左衛門	天保4年(1833)後台村の庄屋、明治元年(1868)歿。青柳村の神官小川伊織に学ぶ。寡言実行、信義に厚い人で近隣の門人ら118人、師恩に報いようと墓碑を建立。

※詳しくは、『広報なか』に連載した「歴史民俗資料館だより」(水鳥④、⑤ ※2016年9月、10月掲載)をご参照ください。

水鳥

24

那珂市の教育遺産群（前編）

「私塾と寺子屋」

平成27年（2015）4月23日、水戸の教育遺産群でもある弘道館・偕楽園および成沢の日新塾などが、栃木県の足利学校、岡山県の閑谷学校、大分県日田市の成誼園とともに日本遺産に登録されました。中でも足利学校は、鎌倉時代・室町時代の最高学府といわれますが、那珂市にも下大賀の弘願寺に文明10年（1478）に出版された「金剛般若波羅蜜経」の版木が存在します。そのころの出版業は鎌倉が中心となっていました。この常陸国の瓜連においても印刷出版の事業が行われていたことを示す貴重な資料です。これらを考えると、中世におけるこの地域の学術文化の高さを知ることができます。

▼弘願寺所蔵の金剛般若波羅蜜経版木



ここでは、近世・近代における那珂市の教育遺産群として、医学を含む文武両面にわたる主な私塾と寺子屋およびそれらを担ったひとびとを紹介します。（写真「寿蔵碑」「墓碑」は当該記事人物のものです）

私塾と寺子屋

江戸時代から明治初期にかけての農村での教育は、僧侶や神官・修験などが師匠となつて読み・書き・そろばんを教えました。これが寺子屋教育であり、教える子は寺子と呼ばれました。戦国時代末期に、寺院で武士や町家の子弟を教育したことに源流があるので、後には寺院以外の塾もあるのです。寺子屋といいました。主な教科書は「庭訓往来」「実語教」「女今川」「書簡文」などで、それらの素読、暗記、書写を中心とする初歩的な教育でした。また「論語」「孟子」「孝経」などの儒学を中心とする道德的なものもありました。寺子は村内でも役付きの子息が学問好きの子どもであり、7歳くらいから入門しました。塾は寺子屋より一歩進んだ内容の教育で、地理や歴史・医学など専門性もあったと考えられます。市内の指導者も塾か寺子屋かは明確には区別できませんので、地域ごとに紹介します。

藩校と郷校

江戸幕府を担った幕臣たち子弟の教育は、上野の「昌平坂学問所」（後に昌平黉）で行われました。諸藩では、藩校を建立して子弟の教育がなされました。しかし、水戸藩の藩校は9代藩主斉昭の時代、天保12年（1841）の「弘道館」建設まで待たなければなりません。『大日本史』の編さんをはじめ文教政策に熱心であった2代藩主光圀は、藩校の建設には及びませんでした。それは、編さん事業の推進が大きな理由であったと思われる。しかし、教育は編さん事業の拠点であった「史館（彰考館）」での「史館講釈」や太田御殿での「馬場講釈」などが行われていました。加えて編さんを行う学者たちも、森儼塾などのように水戸城下に私塾を開いていました。中期からは、城下の八幡小路（田見小路）に朱舜水を祀る舜水堂が建てられて「舜水堂講釈」も行われました。

▼復元された暇修館



水戸藩としての学校建設は、文化元年（1804）に小川（小美玉市）に設けられた「稽医館」とよばれる郷校が始まりました。その後は、同4年（1807）に潮来の「延方学校」が設けられ、そのおよそ30年後には、湊（ひたちなか市）に「敬業館」が開かれ、さらに太田に「益習館」、大久保（日立市）に「興芸館」（後に「暇修館」と改称）、野口（常陸大宮市）に「時雍館」と次々と郷校が建設され、周辺村々の庄屋・組頭およびその子弟たちが勉学に通いました。そのほかには、村々の庄屋・組頭や僧侶・修験・神官たちが寺子屋・家塾を開いて近隣の子弟の指導に当たっていたのでした。

私塾・寺子屋の指導者

○原好誼軒邦明



▲鈴木梅岡画
「原好誼軒」
提供：原公史氏

号は好誼、額田村の人。安永4年（1775）白羽村（常陸太田市）の渡辺家に誕生し、19歳のときに額田で家伝の卵薬の製造販売もしていた原重光に請われて養子となりました。地理学者長久保赤水の門人であった太田の立川淳美に師事して学問修業に努め、真率会を組織して「孝経」「論語」を講義し、人としての道徳や婦人の道を指導しました。また、お茶や汁物だけの質素で純粋に学問に励む講座「汁講」を行い、質素倹約を奨励しました。「占春亭」と名付けた書齋には近郷からの子弟が集い、その数は100人を超えました。好誼軒の晩年、嘉永5年（1852）に門人たちが相謀って原家の菩提寺である引接寺内に寿蔵碑（生前に本人の生涯を記して建てるもの）を建立しています。

好誼軒は貴重な「占春亭日記」などを残していますが、「豊後の国二孝女

物語」にも関係しています。遠く豊後（大分県）から親鸞聖人の遺跡を訪ねてやってきた父親が、病に倒れて青蓮寺（常陸太田市）で世話になっていることを知った二人の姉妹が、さまざまな苦難を経ながら迎えにやってきました。この親子が帰郷するに当たって、大勢の村人が見送りますが、好誼軒も、かつて水戸藩主も愛でたことのある自宅庭の栗の実を、孝養の供えにもと贈りました。栗は苦離・旧里（久里）を意味するものであり、さらに「遠く父を旧里に伴い、神仏の助けによって離苦得樂の時もあるであろう。父子ともに彼の国に帰って孝道を尽くせることを期待します。」と記した上で、『東まで薫りこぼして豊後梅』と詠んで贈っています。



○海後山城

諱は宗邦、三島神社の神官海後大和宗辰の子です。幼少より読書を好み、長じて父の後を継ぎました。文政・天保時代には好学の理由により、藩から褒賞を得ています。いつから子弟教育に入ったかは明らかではありませんが、門人は地元本米崎の者が大多数で、墓碑には50数人の名が見えます。桜田門外の変に参加した海後礎磯之介宗親は、その4男です。



▲三島神社

○山田京山

天保14年（1843）9月西木倉村に生まれ、諱は義質、通称は強介。長らく水戸藩士矢口氏に就いて和漢の学を修め、後に家塾を開きました。書画や詩歌をよくし、ことに俳句では名吟口を衝いて出で、常に同行の点者となりました。問われれば詩を詠み、胸襟を披瀝して吟唱飽くことを知らなかったといわれます。それにより、師匠の遅月より宗匠の資格を得たこともあって、明治31年（1898）に雪華庵京山と号します。ますますその道に進み、その門人は500余人にのぼったといわれます。大正5年（1916）に73歳で歿しました。門人一同は相謀り「報恩、山田京山先生之碑」を西木倉原ノ内の山田家先塋の地に建立しています。



○根本藤兵衛照郷

額田村の人。幼少から学を好み名声は近隣に聞こえていました。庄屋職を辞し、江戸に出て紀州藩士の榊原元軌に師事しました。帰郷後は、詩歌を中心にさらに指導に専念しました。四方から雅客墨人が来訪し、教えを受けています。明治9年（1876）、藤兵衛73歳の時、門人たちが300人が鱗勝院境内に謝恩の念をもつて寿蔵碑「照郷根本先生墓」を建立しました。



○奈治原如清・民部父子

鴻巣村鷺神社に隣接する宝幢院の修験であつた如清は、寛政期(1789)1800に塾を開き、門人は鴻巣村の115人、飯田村の55人、戸崎村の15人、門部村の12人、中岡村の11人などを含む235人をはじめ、近郷の上坪村(城里町)や野口・下岩瀬・岩崎(常陸大宮市)、上国井(水戸市)などの各村を含めて400人超といわれました。そのうち、女子は鴻巣村が6人、飯田村でも4人いました。盛りのころは、集う門人は日に数十人の賑わいであつたといわれます。天保5年(1834)80歳で歿しました。

主な門人には中岡村鹿島で寺子屋を開いた海野英彦、額田村鈴木市十郎の子孫世美(梅岡)、菅谷村庄屋で山横目の横須賀勘兵衛、飯田村庄屋大和田源衛門、鴻巣村で私塾を開いた大内仁寿、戸崎村庄屋綿引清三郎、上坪村神官今瀬織部などがあります。

一方、民部(字は斐雄)は馬頭村の修験に生まれ、如清の養子となつて文政3年(1820)22歳で後を継

ぎ、天保15年(1844)に飯田村と戸崎村の鎮守の神官となりました。その間、鴻巣56人、飯田50人、戸崎27人、門部7人・南酒出2人など142人を含め、近郷近在からの門弟は265人を数えました。このうち、女子は鴻巣村で1人、飯田村で3人いました。門人の中には飯田村庄屋大和田源衛門・貞蔵父子、兼帯庄屋青山四郎、修験・神官となつた小田倉祐貞、無比流杖術・為我流柔術指南富田兵左衛門、飯田村長となる大和田兵四郎、芳野小学校初代校長となる大和田貞勝、芳野村初代村長となる宮本逸平らがいます。明治3年(1870)、72歳で歿しました(墓は整理撤去されています)。



安崇は文化5年(1808)3月に生まれた古徳村の神官(祝)で、文久元年(1861)に54歳で歿しました。古徳と静の村境近くに藤田屋敷と称する一郭があります。この寺子屋で教えを受けた者には、静村の黒沢忠治・黒沢久米八や門部村の金沢孫兵衛のほか、小場村(常陸大宮市)の安藤東之進や盛金村(大子町)の上久保源次兵衛、西金村(大子町)の河井孝四郎、八田村(常陸大宮市)の鈴木才介などがおり、墓碑の台石には周辺の村々からの門人84人の名が刻まれています。碑は、文久元年(1861)11月に建立されました。



○大内常衛門仁寿

周防(山口県)を祖先の地とする大内氏の子孫で、鴻巣村根城内に生まれしました。初名は重兵衛、諱は仁寿、字は子徳・鴻峯とし、鷺山と号しました。幼少より学を好み、宝幢院の修験奈治原如清に師事し、さらに文政6年(1823)4月から文政10年5月まで儒学を中心に研究を深め、天保期(1830)1844から私塾を開設して子弟教育に努めました。碑文には「先生、神儒を尊び、常に賓客を喜び、暇あるごとに読書す。月の夕べ、花の晨に詩を吟じ、邸宅その美を好まず」と称えられています。明治の学制公布に当たっては、私学開業を願ひ出で、明治6年(1873)7月に官許を得て私塾を開校し、それに時習舎あるいは鴻学舎と名づけました。「鷺山大内先生之墓」の碑は、鴻巣の木戸共同墓地区内にあります。



○小田倉祐貞

飯田村に生まれ、三極院を称しました。諱は祐貞、字は秀勢、号は椿庵です。元は大和田氏で水戸藩附家老中山氏に仕え、その後修験であつた小田倉姓を継いでいます。また、藩主斉昭の追鳥狩など軍事訓練では遊撃隊員として活躍しました。明治元年(1868)の戊辰戦争の最中、水戸藩内はまだ大狗・諸生の抗争が続いており、祐貞は諸生派に属して一時会津藩兵とともに官軍と戦いながら出羽・越後方面を逃走、8年の歳月を送り帰郷しました。その後、家塾「三極院」を開いて周辺のひとびとの指導に当たる一方、衛生委員や村会議長を務め、明治26年(1893)2月9日に70歳で歿しました。「椿庵翁之墓」は明治28年の建立、撰文は元水戸藩士で文化大学教授も努めた内藤耻叟です。



○藤田安崇

○海野家三代(英彦・照睿・瑞彦)

海野家の祖先は信州(長野県)の滋野氏で、鹿島字堂山吉祥院の修験です。院の境内には東征神社が建っています。英彦(号は松雪)は、奈治原如清の門人で天保12年(1841)に病歿しました。門人は地元では中里の35人を筆頭に、門部26人、磯崎22人、中岡・戸崎12人、また太田、助川、宇留野の各村など広範囲にわたっています。異色の門人では、助川城主山野辺氏の家臣小川弥七がいます。

照睿は英彦の長子で椿齋と号し、詩歌・俳諧をよくし、算術にも通じました。その一方で医療にも通じ、しばしば村人を病から救ったといわれます。門人には戸崎村庄屋綿引左衛門や南酒出村組頭稲田宗七ら200余人に上ると云われます。

瑞彦は照睿の長子で天保3年(1832)に生まれ、東潮と号しました。幼少より祖父英彦の薫陶を受け、学問・書に造詣が深く、明治期に入って谷河原(常陸太田市)・地元鹿島神社の神官を務めました。寺子屋教育に従事すること60余年、諄々として熱心に教えたといわれています。学制発布後は、境内に創設された門部村鹿島村合併の朋来小学校で教鞭を執っています。門人の範囲は鹿島・門部・中里・瓜連・飯田・戸崎・古徳・鴻巣・静などの各村に及び、主な門人には、木崎村長となった中崎聚・小泉三次郎、瓜連村長となる清水初太郎らがいます。大正5年(1916)、85歳で歿しました。墓碑は、大正6年に建立され、常福寺住職安西覚順の撰文です。

○中井川量之介

文政元年(1818)生まれの門部村の農民で、耕吟と号しました。幼少より読書が好き、良く父母に仕えました。はじめ吉祥院修験海野英彦の門人となりますが、家事にも大いに励み、外出に当たっては必ず書を携えたという勉強家でした。また、水戸の学者青山延光・藤田東湖に師事して学問を修め、和歌・俳諧(俳号は「米花」)をもよくしました。藩主斉昭が幕府から処罰を受けた際には、和歌を献上して憂国の意を述べ、斉昭の感賞を得ています。門人の数はおよそ200余人、明治期に入り朋来小学校で教鞭を執りました。「耕吟中井川翁碑」の撰文は水戸藩学者であった津田信存、明治20年(1887)に門人らが建立したもので、門部坪の共同墓地内にあります。



○齋藤監物、徳親・徳寛、務

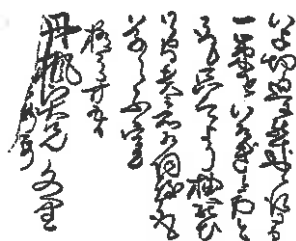


▲齋藤家墓所

静神社の神官齋藤家は、幕末から昭和初期にかけて寺子屋教育に尽力しています。監物の子である徳親、

び徳親の子の務と三代にわたっている人たちです。監物の剣は神道無念流、書は藤田東湖流であり、監物の弟、齋藤式部も東湖流でした。監物は、加倉井砂山や藤田東湖に学び、大宮郷校、野口郷校でも教授しています。

監物は、万延元年(1860)3月3日の桜田門外の変に参画するなど国事に奔走していましたので、門弟の指導も容易ではなかったと思われる。監物の歿後は式部が漢字の指導をし、明治20年(1887)ごろからは徳親兄弟および徳親の子務が周辺地方の青少年育成に貢献しました。



▲高橋多一郎宛監物書状
秋山義隆著
『古文書に親しむ』より

○安西覚順



慶応2年(1866)4月、菅田村(常陸太田市)に生まれました。常福寺71世の住職となり、布教師長などを務

めて常に宗教の振興に尽力しました。農閑期には寺の入口脇(右写真)に寺子屋「耕餘学舎」を設け、儒学・歴史・唐詩選などを教授しました。門人らは、瓜連、静、下大賀、門部はもちろんな村田、石沢、岩瀬などの各村から30~40人が集まり教えを受けました。大正10年(1921)1月、55歳で歿しました。覚順に、寺子屋の様子を詠んだ次のような漢詩「耕餘学舎経営」があります。

蕭條として寒林草廬を閉む
風塵已外幽居を楽しむ
南軒日暖かにして梅薫る処
閑に村童を伴って古書を読む

水鳥

25

那珂市の教育遺産群（後編）
「私塾と寺子屋」

水戸藩の弘道館は「文武両道、学問事業その効を殊にせず」を教育の基本に置いていました。さらに医学や天文学なども加えた総合大学の性格を持っていました。後編では、和算の普及と武道方面についてまとめました。武道については、武士は剣術・剣道・砲術でしたが、水戸城下周辺の村々には無比流棒術や為我流柔術が盛んに広がりました。その武道には多くの免許皆伝を受けた者が出ています。その主な武術とその師匠を紹介してみます。

また、これまでの市史編さん関係本に漏れていました、後台村の寺子屋師匠「鈴木長左衛門」についても補っておきます。このたび水戸市の田口誠二氏からご教示をいただいたものです。

和算普及の祖となる石川貫道

水戸藩の和算は笠原水道を設計した平賀保秀に始まり、やがて関孝和の「関流」が藩内に広く流行しました。農村部では額田村の原敬敦、福田村の高橋重輔らが和算家として知られています。高橋の弟子に南酒出村に和算塾を開いた石川清助貫道がいます。増井村（常陸太田市）の本多家から安政年間に南酒出村石川家の養子となりました。若いときから足が不自由で農作業も困難であったため、和算にかける情熱は盛んなものでありました。

門人は地元南酒出村の51人をはじめ、横堀村3人・額田村23人・菅谷村10人・門部村9人・北酒出村7人、鴻巣村6人など大勢に上り、さらに大戸村（茨城町）には12人、また久慈、多賀、鹿島の各郡へは出張教授も行っています。門人総勢は200人を超え、その盛況ぶりは連日30人を超えたといわれています。

明治6年（1873）には北酒出・南酒出両村設置の深耕小学校で数学の教員となります。門人の高弟には南酒出村の桐原好道・片岡亀吉・桐原舎道・袴塚巳之松・袴塚忠之助、菅谷村の平野又衛門、鴻巣

村の津田盛遠らがいます。やがて門人ら一同が相談し、南酒出蒼龍寺境内石川家墓地内に「関流八傳故石川貫道先生墓」を建てています。また、前述した南酒出村の門人桐原好道・片岡亀吉・桐原舎道ら3人もそれぞれに私塾を開き、その門人たちが師匠への謝恩の墓碑を建立しています。南酒出地域においていかに算学が盛んであったかを示しています。

なお、和算仲間には、研究した問題と解答を「額」にして神仏に奉納し感謝する習慣がありました。明治14年（1881）、石川貫道を願主として高弟26人が静神社に算額を奉納しています。



平野又左衛門重義

菅谷寄居の又左衛門は為我流柔術の免許皆伝であり、「その術神のごとし」と伝えられ、その門人は幕末から明治期にかけて1000人を超えています。那珂市域には菅谷村の91人、鴻巣村の39人、門部村の35人をはじめおよそ260人にのぼりました。その内、指南免許を得て道場持ちとなり、明治期に入って活躍した者に、門部村の鈴木藤兵衛重則・勝山治介信道・楠見要之允、飯田村の富田兵左衛門知意、菅谷村の砂押兵次郎重春・飛田文五郎源重、鴻巣村の沢幡忠蔵好洋らがいます。又左衛門82歳の晩年にあたる明治15年（1882）、門人らが相談して寿蔵碑「報厥徳」（厥の徳に報いる）を寄居共同墓地内に建立しています。



鈴木長左衛門

鈴木長左衛門、諱は惇義、後に長左衛門と改めます。寛政8年(1796)5月に誕生、天保4年(1833)から同7年まで後台村の庄屋を務め、明治元年(1868)11月、73歳で病歿し村内の鈴木氏先塋の墓に埋葬されました。

長左衛門は幼少より読書を好み、青柳村(水戸市)鹿島香取神社の神官小川伊織(子息は修理)に就いて学びました。常に読書に励み、性格は実直、物欲は少ない方でした。無駄な議論や遊びごとといえどもよく相手となりました。近隣の子どもたちを教え導きました。能弁ではありませんが、粘り強く諄々と説き続け、その教えはしみじみと心にしみたものでした。その門人は、子息の義重や世話人を含めて118人にのぼります。

明治4年(1871)11月、門人たちは長子の義重と相談して謝恩の碑を建てました。撰文は弘道館で教授した後、木倉小学校にも勤務した塙正脩です。門人のほとんどは周辺の人々ですが、その中に女性も入っています。

当時の学習意欲を窺うことができますので、台石に刻銘された門人名をあげておきます。

鈴木次郎左衛門敏信、井上四良平、鈴木源衛門、海野傳吾兵エ、三田寺彦十、塩埜弥吾良、小森常エ

門、石川伊之太良、鴨志田次良平、海埜長次良、會沢与志兵エ、同太三良、増子平蔵、井上元工門、石川庄兵エ、大和田長四良、廣瀬左吾良、井上藤次兵エ、後藤熊吉、寺門亀吉、小嶺新吾、山田八良工門、石川吾良兵エ、三田寺久工門、鈴木重工門、海埜長兵エ、井上久三良、鴨志田四良工門、同口市工門、鈴木平吾良、三田寺清介、井上弥八、同初太良、同長七、高野太兵エ、鴨志田千代吉、同清兵エ、井上元十、同子之吉、鈴木治惣治、井上宗七、鴨志田栄十、三田寺彌之介、井上庄蔵、同与吾平、小林新工門、井上与左工門、松田貞介、山田与惣工門、同八五良、松田卯之松、軍司幸七、磯崎惣吾良、鴨志田甚工門、同宗吾良、同長吾良、石川秀松、大曾根清七、塩埜新十良、同勘三良、塩埜口之口、會沢卯之吉、鈴木兼太良、鴨志田才太良、同右馬治良、海野安工門、井上新四良、鴨志田平四良、井上治良、塩埜春吉、廣瀬佐一工門、井上未治良、同熊治良、寺門惣治良、海埜源之介、鈴木惣七良、三田寺房之介、同勘之介、綿引三良工門、同初太良、井上寅吉、同捨吉、鴨志田口治良、廣瀬藤三良、同己之吉、鴨志田留吉、鈴木真治良、同熊吉、鴨志田仙治良、井上三之介、鈴木泉二良、鈴木秀吉、同口治良、廣

瀬おいき、鈴木おつき、海埜おとく、鈴木おひて、三田寺おそよ、鈴木おあき、會沢おやを、鈴木おすて、會沢おあき、鈴木おいし、三田寺およし、鴨志田おみよ、鈴木おくら、同おわくり、同おゑい、鴨志田おみき、海埜傳之允、鴨志田茂工門、廣瀬藤七、三田寺四良介、山田七良、會沢郡之允、塩埜弥一兵エ、井上藤兵エ、鈴木惣兵エ敏行

このほか、寺子屋を開いた者に、福田村春日神社の神官今瀬清珉、後台村鹿島三島神社の神官小坪雄之進、額田村の鈴木一之允、同村鱗勝院の慧空和尚らがあります。家塾を開いた者に、南酒出村の修験で般若院を開いた本多清剣や同村の沢田剛蔵、額田村の助川千之允、菅谷村の根本静雄らが出ています。

また、文芸・芸能仲間としては額田の中嶋五峰らを中心とする俳諧、および絵画・長唄仲間もありました。



会沢伊三郎主膳

会沢伊三郎は後台新地の人、諱は主膳、壮年から棒術に関心を深め、佐野村(ひたちなか市)の沼田伊兵衛に就いて無比流棒術を学ぶこと数年、日々修行を怠ることなく、たちまちにしてその免許を得ました。性格は朴直にして度量があり、人に接するに謙譲の美德をもつて親しみよく指導にあたり、その門人は200人を超えるほどでした。明治33年(1900)4月に弘道館で行われた茨城県武徳会支部総会において、総裁小松宮彰仁親王の上覧の際にはその妙技を披露し、高く評価されました。明治41年(1908)2月、門人たちが相謀つて寿蔵碑「頌徳」を新地共同墓地に建立しましたが、主膳は明治42年3月に歿しました。



後藤三之助

▼『為我流和神文』後藤和己氏所蔵



芳野村鴻巣の
後藤三之助は、
吉岡流・浅山流・
藤山流を合流し
た為我流を平野
又左衛門の弟子
沢幡忠蔵や沢幡
林助から教えを
受け、明治27年

(1894)に師匠として流派を譲り
受け、自宅に道場を開いて近隣の子
弟の指導に当たりました。後藤家には
「相伝の際は親兄弟といえども他
見他言は無用にて取り組みは人に見
せないように」「師匠の恩を忘れ新流
を取り始めた場合は、7代にわたつ
て罪を掛けられること」などを誓つ
た『為我流和神文』があります。ま
た、後藤家所蔵の門人一覧には芳野
村鴻巣の高島清吉、津田繁之介、宮
本貞吉、昨野保之介、細谷潤一郎、
海野末吉ら、同村飯田の平松満次
郎、横山傳左衛門ら、同村戸崎では
小林豊之助ら、さらに村域外にも南
酒出や木葉下などからの入門者など
全員で27人が載っています。



▲門人一覧

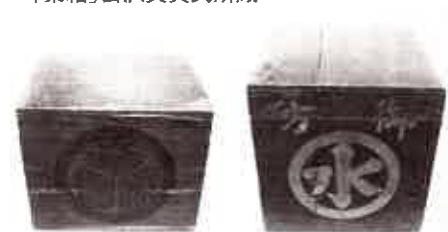
富田兵左衛門知意



富田兵左衛門は、9歳の
ときに鴻巣の奈治原民部の
門に学んで和漢の学に通じ
ました。加えて、杖術・柔
術・弓術・剣術にも達し、後
に帝国尚武会に入って師範
の証を受け、よく青年子弟
を指導し「棒の兵左衛門」
柔の兵左衛門」との異名で
語りつがれていました。兵
左衛門の寿蔵碑「兵左衛門
富田先生碑」は、754人
の門人たちが相謀って建立
したものに頼る大きく
立派なものでした。飯田中
島の共同墓地にありました
が、現在は解体整理されて
います。

医術面

▼「薬箱」会沢貞美氏所蔵



水戸藩の医師では基礎医学
を開いた原南陽、全身麻酔薬
や人痘接種法の修得に貢献し
た本間玄調が名高く、それら
の影響を受けて医術を修めた
者に北酒出村の長山頼綱・頼
明・行頼の親子三代がいます。
行頼の子行秀は、額田村の原
好誼軒と交流を持ち、藩の表
医師となっています。鴻巣村
の会沢寿量(字は寿貞)は、水
戸藩の侍医本間道偉に学び、

門弟を養成しています。その医術は優れて、患者は門
前に市をなしたといわれました。その医術の精妙を
もつて郷校野口時雍館の世話役も務めています。その
子寿貞徳善も藩医本間諒に就いて医術を修め、幕末の
藩内抗争では負傷の藩士たちの治療に当たっていま
す。このほか、飯田村の長谷川友哉・有節父子、横堀
村の川又貞淳、堤村の若葉周圭(沢畑武夫)、南酒出村
の後藤養節、下江戸村の堀口玄門、額田南郷の寺門玄
雄らがいます。

医術にかかれぬ庶民の治療として本草学(薬草)が
普及しており、水戸藩医原南陽の門人の一人で小目村
(常陸太田市)出身の木内玄節がいます。この薬草など
による那珂市域にあった家伝の妙薬を紹介して終わり
ます。

下江戸村齋藤家の家伝薬「香砂平胃散」「香砂平胃
丸」、鴻巣村高島家「とげぬき散」、飯田村小田倉家の
「人参五香湯」と鹿島村海野家の「人参五香湯」、額田村
鈴木家の「たまご葉」と原家の「たまご葉」、飯田村小林
家の「神麝丸」「銭氏白術散」などが知られています。

まとめ

このように、江戸時代には
は広く民間にも文武両面に
わたつての教育が普及して
いたことがわかります。こ
れら庶民の営みが、明治維
新以降の近代化を担う大き
な力になっていたことを考
えると、歴史の進展に寄与
する教育の力の大きいこと
を再認識することができま
す。

また、その師弟間には篤
い信頼関係・情愛の念が強
く流れていました。多くの
門人たちは、師のためにと
相謀り、謝恩の意を込め
て「寿蔵碑」を建てていま
す。実に驚嘆に値すること
です。市内にあるこれらの
教育遺産群に思いを馳せつ
つ、明日の教育、地域づく
りに邁進したいものです。

問い合わせ

歴史民俗資料館

☎297-0080